

コノシロの食性と宍道湖・中海の環境

越川敏樹（ホシザキグリーン財団環境修復プロジェクト）

コノシロは、現在の宍道湖・中海水域において、生息数がきわめて多い魚種である。それゆえ、時に大量へい死のような事象が生じ、生態面だけでなく社会的な問題にまで広がることもある。

今回は、コノシロの食性を通じて、当調査期間（2014年4～7月）における宍道湖と中海の餌環境特性、および、ほかの多くの魚種が減少する中で、逆に多くの個体数の維持を可能にしている当水域の生態系メカニズムの一端を捉えてみる。

コノシロは、カイアシ類などの動物プランクトンから底泥に潜む多くの種類のベントスを食べている。5～7月においては、宍道湖でカイアシ類・アミ類が多かったのに対して、中海では、多毛類・二枚貝（幼貝）また有機泥など湖底に存在するものが多かった。そのことは、コノシロにとって、当期間は宍道湖の方が中海よりも栄養効率のよい餌環境にあったことがうかがえる。

また、この期間中（5・6月）における刺網で採集されたコノシロの数量は、宍道湖で多く、中海で少なかった。さらに、本種の魚体の平均サイズも、宍道湖の方が中海よりも1センチメートル以上大きかった。

今回の刺網調査で、コノシロのほかにも多く漁獲された魚種は、スズキであり、次いで、ボラとウグイ（特に中海）が続いた。これらの魚は、現在、宍道湖・中海において、コノシロとともに生態的に優占する大型魚であり、それぞれの食性内容は一部が重なり合うものの、全体的にみると競合の程度は少ないものと考えられる。



刺網調査の様子（宍道湖）